雲仙 長崎県

仁田峠から遠望する平成新山。1991年の大噴火で造られた本土で最も新しい火山。1483mの標高は普賢岳を抜き雲仙では最高峰。うっすらとを雪化粧を施した山頂と、火山の猛々しさを全面に押し出す山肌。コントラストに満ちた光景が何とも美しい。国の天然記念物に指定されている

雲仙岳三峰の1つ妙見岳から眺めた普賢岳（上）。桜が満開、と見紛うばかりに名物の霧氷が咲き乱れる（左）。南国でありながら冬の光景は雪国そのもの。そのギャップに驚かされる

妙見岳山頂へといざなう雲仙ロープウェイ

創業300年以上を誇る雲仙温泉の最古参・湯元ホテル（上）と、自慢の、乳白色の露天風呂（下）

南側に遠く天草諸島を臨む。天草・島原の乱に想いを馳せるには、まさに打ってつけの場所でもある

インバウンド観光発祥の地

かつては「温泉」と書いて「うんぜん」と称した。1931（昭和6）年に国立公園法（現・自然公園法）が施行され、瀬戸内海、霧島と共にこの地が日本発の国立公園に選定されたのに伴い「雲仙」と改めた。大正に入ると長崎～上海航路が開業、本土最西端・長崎は海外に最も近い日本の玄関口として賑わい、欧米の観光客・ビジネスマンが押し寄せた。もちろん至近に控える風光明媚な雲仙・島原もお目当ての一つ。三方に海を臨む島原半島の真ん中に、冬には雪を戴く普賢岳と豊かな山海の幸、温和な気候と人柄、そして名湯。裾野に広がる高原地帯は避暑地としても彼らに愛され、別荘も続々と誕生。その名は遠く西洋にも轟いた。観光関連の「日本初」も数多く、ゴルフ場（「雲仙ゴルフ場」）、自動ドア、展望エレベーターを有する旅館（雲仙宮崎旅館）などがその典型。インバウンドに対応すべく、長崎には国策会社の日本交通公社（現・JTB）が旗揚げされたほど。「観光立国・ニッポン」の原点がここにはある。

写真協力：湯元ホテル